

# 粘土を活用した幼児教育の可能性

## — 保育者養成の視点から —

三上 慧<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学非常勤講師

### 【抄録】

幼児教育における「造形」の本来の目的は、表現技法の習得を促すことではない。本研究自身は、担当授業「造形」の前期に取り組む課題「テラコッタ粘土制作」において、幼児が試行錯誤を通して自らつくる喜びや発見の驚きを体感し、表現する上での創造力を育むことを重要視した保育支援の在り方を考えている。本研究では、粘土を活用した幼児教育の可能性について、学生を対象としたアンケート調査を基に、彼らが志望する保育士・幼稚園教諭に求められる職能との関わりに着目しながら論考する。

### 【キーワード】

粘土 造形 幼児教育 保育者養成 触覚性

## 1. はじめに

本学「造形」の授業は保育学科1年次の必修授業である。筆者が2011年から非常勤講師として本授業を担当する中で常に考えてきたことは、将来保育・幼児教育の現場で子どもたちに関わる短大生たちに、本授業担当者として言動上で特に配慮すべきことは何かである。「受講生が何を学び感じ取れるように心がけるべきか」、「そのための言葉がけとして大切なことは何か」を自問しながら、「造形」の授業の在り方について考え方向性を見出す必要がある。

本研究のねらいは、受講生を対象として実施したアンケート調査結果の分析を基に、彼らが志望する保育士・幼稚園教諭に求められる職能との関わりに着目しながら、粘土を活用した幼児教育の可能性について考察を深めることである。

## 2. 研究の背景

本稿で取り上げる制作課題は、前期の「テラコッタ粘土制作」である。まずは研究の背景として、「粘土」と課題「テラコッタ粘土制作」について触れておきたい。

### (1) 粘土

造形の材料の中で、土（粘土）というのは最も人間にとって原始的で根源的だと感じられる。旧約聖書によればアダム（ヘブライ語で「土」の意味）は一握りの土から造られたとされているのが興味深い。また、日本では土器や土偶、中国では兵馬俑など、世界的に太古から土で造形された遺品が出土してきた。幼児を見ていると、砂遊びや泥遊びなどに本能的に夢中になる様子が窺え、土と人との関係には時代・国境を超えて強い結びつきが

あると考えられる。

授業で扱うテラコッタ (terra cotta) とはイタリア語で「焼いた土」の意味であり、粘土制作後に陶芸窯で焼いて作品完成となる。しかし、本稿では「粘土」という素材そのものとの触れ合いに焦点を当て考察の糸口を探っていきたいため、テラコッタ粘土のみにこだわらず、それと触感性や特性が近く幼児教育の現場でより用いられている土粘土 (水粘土ともいう) も対象に含め、単に「粘土」と総称して考察したい。テラコッタ粘土は土粘土の一種である。土粘土は一般的な彫塑用粘土であり、可塑性・粘性に優れ、幼児から専門家まで幅広く活用されている。硬化しても水分を加えることで再生可能であり、他の粘土に比べて大量に用意することができるので、全身で関わる活動やダイナミックな造形活動が展開できる。粘土の保管は、乾燥を防ぐためになるべく空気を遮断し密閉した状態が望ましい。

上記の2種の天然の粘土の特徴は、前述の通り可塑性と粘性にある。水分の量を調整すると粘土の柔らかさを自在に変えることができることも挙げられる。水分をかなり多くすると泥遊びに近い状態にもなるため、素材としての幅が広く自由度も高い。一方、人工の粘土である小麦粉粘土【図1】・油粘土・紙粘土については、同じく幼児教育や家庭でも用いられる粘土ではあるが、その触感性や使用性が天然の粘土とはかなり異なる。小麦粉粘土は食用の小麦粉・水・油・塩・食紅など口に入れても安全な材料で制作するため、比較的幼児に向けた粘土といえる。細かい造形はしにくいだが、握る・押す・潰す・引っ張る・伸ばすなどを通して感覚遊びを行うのに適している。長期の再利用は不可のため、1～2日内で冷暗所にて容器に保管して使用する。油粘土は、乾燥に強く弾力性や粘着性に優れているため、日常的に手軽に造形遊びができる。保管においても手間がかからないが、

気温によって硬軟の変化があり、独特のにおいが苦手な人も多い。また、強度が弱いので、大きな造形には不向きである。紙粘土は乾燥すると収縮し硬く軽くなるため再利用はできない。しかし、乾燥後に着色することが可能なので、長期に展示する作品制作に向いている。塊で造っても重量感あまり出ず、大量に使うのは不向きである。あらかじめ色のついているカラー紙粘土や軽いものなどいろいろな種類がある。

各種粘土のプラス面・マイナス面を理解し、目的や現場に応じて保育者が適切な粘土を選ぶことになるが、本稿では土粘土及びテラコッタ粘土の特性に着目したいため、紙面の都合上他の粘土については深く言及しない。



【図1】 学生による小麦粉粘土の完成作品 (一部)

## (2) 課題「テラコッタ粘土制作」

本課題は前期15回の授業の内6回にわたる。他の課題が1～3回で区切りがつくのに対し、前期に長期的に取り組む唯一の課題である。全6回内の3回は、作業の都合上、短時間で終了した者からスケッチブックをまとめる時間に行っているが、それでも本課題の前期に占める割合は大きく、「造形」のメインとして位置づけされる。

テラコッタ制作体験の過程を通して培われる資質・能力が、現場で保育士・幼稚園教諭に求められる力にどのように関わらるだろうか。これまで筆者は、①造形活動を楽しむ精神面、②道具・材料の扱いや立体制作における技術面、③幼児と活動

する場合の安全面などに配慮しながら学生本人と作品制作に寄り添うように心がけてきた。しかし、美術を専門としない保育者志望生たちに向けて、筆者からの大切にすべき言葉がけとはどのようなものかについて、もっと根本的で本質的な問題を考える必要も感じてきた。幼児期は創造活動の原点であり大切な時期である。保育者の関わり方次第で子どもの成長が変わり得ることも予想され、保育者の資質や意識のあり方が重要となってくる。筆者の専門が彫刻であることから、現場での造形遊びにおける粘土の位置づけとは如何なるものかという関心も高く、度重なる自問自答が本研究の動機づけとなった。

授業（全6回）の制作過程は、下記の9段階にわたる。詳細は「5. 結果と考察」で後述する。

- ①土練り（粉に水を加えて、手で土を練る）【表1】
- ②成形（4つの制作技法の紹介：手びねり、板づくり、紐づくり、ふたつ割り）
- ③乾燥後、窯入れ1回目（外の窯場まで自分で運ぶ）
- ④窯出し1回目（素焼きした作品と対面する）
- ⑤施釉（釉薬で着色する）
- ⑥窯入れ2回目（希望者はおはじきなど小さなガラスを入れて、再び窯場に運ぶ）
- ⑦窯出し2回目（本焼きした完成作品と対面し、自宅へ持ち帰る）【図2】
- ⑧撮影（背景や構成を工夫して撮影したデータを、大学のパソコンのYドライブに提出する）【図3】
- ⑨相互鑑賞（1年生全員分の提出画像を鑑賞し、各自が選んだ3作品についてQRコードを活用してコメントを送信する）

以上の過程を通して、学生たちはものづくりや粘土遊びの楽しさを実感しながら、1人1つの作

品を制作する。希望に応じて2～3つ作る者もいるが、粘土の1人当たりの分量は大体同じである。

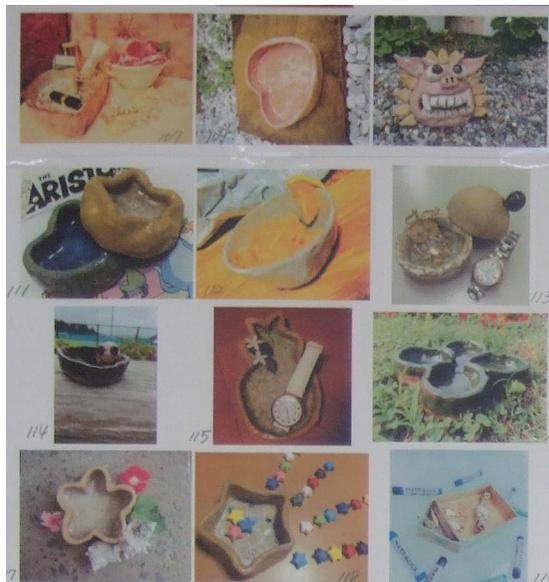
教員は作品制作において焼成に耐えうる造形的構築性を備えているかを1作ずつもれなく確認し、必要に応じて技術的助言を行う。例えば、前述の4つの技法の紹介、ドベ（粒子状またはドロドロの粘土に水を加え、接着剤のようにしたもの）を使用した接着方法、焼成中の破損や爆発（粘土内の空気の膨張）の原因になることを未然に防ぐための手立て（粘土の厚みを均一にし、塊の作品は中身を空洞にするなど）、粘土の練り方・練り具合、道具の使い方（へら、たたら板、切り糸など）、3次元の立体制作に必要な構造上のアドバイスなどが挙げられる。

全6回の授業終了後は、学生が各自スケッチブックに制作過程（プリント3枚配布）や完成作品（各自の撮影データ）を記録し、反省・まとめを行う。

【表1】土練りのプロセス

1	テラコッタ粘土の粉末を袋からボールにとる（1人あたりお玉で2杯程度）。
2	ボールの粉に少しずつ手で水を加え、粉が少しずつ固まり、複数の小さな丸い土の塊になっていく感触を確かめながら手で土をころがしていく。
3	さらに水を加えることで、土の硬さ（水分量）を調整しながら、扱いやすい軟らかさになるまで練り合わせる。
4	もし水を加えすぎてしまい、練ることが不可能になった場合は、再び粉を加えて硬さを取り戻すことで、水分量を調整する。
5	粉が残らず粘土になり、扱いやすい軟らかさになるまで、ボールの中で練る。

6	粘土の塊をボールから粘土板にうつし、粘土板の上で手のひらに全身の体重をかけて手前から奥に練る。粘土の中に空気が入らないように注意する。
7	粘土が粘土板や手の水分を吸い取り硬くなっていくので、適宜水を加えて粘土の水分量を調整し、練り進める。
8	ほどよい硬さ（よく耳たぶくらいといわれる）の粘土の塊の出来上がり。授業ではクラス全員分をまとめて大きな塊の状態です1週間寝かせてから使用する。



【図3】学生の撮影した提出画像（一部）



【図2】テラコッタ粘土の本焼き後の完成作品（一部）

### 3. 目的

保育者養成校として、学生が志望する保育士・幼稚園教諭に求められる職能との関わりに着目しながら、粘土を活用した幼児教育の可能性について考察し、「造形」の授業の在り方を考える上で大切なことは何かを明らかにすることを目的とする。

### 4. 方法

#### (1) 参加者

「造形」の授業課題「テラコッタ粘土制作」(2016年6～7月実施)の受講者である保育学科1年生134名が対象である。1学年を3クラスに分け、さらに1クラスを隣同士の教室2つに分け、2名の担当教員が同時進行で各々授業を進める。必要に応じて、全体への説明を一方の教室に全員集合して行うこともある。両教室は6つの机（片方の教室にのみ予備の7つ目の机がある）が配置され、各3

## 粘土を活用した幼児教育の可能性

～4名ずつ着席し、グループ内の者同士で協働的に学び合える設定となっている。

### (2) 分析データ

前述の目的のために、筆者が作成した「テラコッタ制作ふりかえりアンケート」【図4】(以下「アンケート」と表記)の分析結果に加え、筆者の授業観察記録も合わせて分析し論考する。アンケートは前期の最終授業2016年7月27日(当日1名欠席につき133名が回答)に実施した。A4・両面印刷で、5つの設問に自由記述による回答欄を設けた。回答欄は1行分のスペースを設け、単刀直入に素直な一言で記入するように促した。

### 5. 結果と考察

以下において、アンケートの結果に関して、設問の設定意図なども含め順に詳しく触れていきたい。学生の記述の引用は「 」で表した。なお、粘土が「柔らかい」という語については、「軟らかい」に改めて統一して表記した。また、【表2～7】の下線部は、2名以上同様のコメントがあったキーワードにつけた。

#### 問い① 最も印象的だった過程を1つ選び、理由を記入してください。

この問いは、テラコッタ粘土に触れることが初めての学生たちが、長期にわたる制作過程の中で特に印象に残っている過程を調査する意図がある。この問いのアンケート結果が、本研究の糸口

「造形」テラコッタ制作ふりかえりアンケート 2016年7月27日

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

設問は5つです。裏面も見てください。

①最も印象的だった過程を1つ選び、左の□に○をつけて、理由を記入してください。

理由:  粘土を水を加えて、手で土を練る

成形 (制作技法の紹介: 手びねり、板づくり、紐づくり、ふたつ割り)

乾燥後、窯入れ1回目 (外の窯場まで自分で運ぶ)

窯出し1回目 (本焼きした作品とご対面)

施釉 (釉薬で着色する)

窯入れ2回目 (おはじきを入れる人はここで。再び窯場に運ぶ)

窯出し2回目 (本焼きした完成作品とご対面、自宅へ持ち帰る)

撮影 (背景や構成を工夫する。大学のパソコンYドライブに提出)

相互鑑賞 (1年生全員分の画像を鑑賞し、各自が選んだ3作品についてQRコードを活用してコメント送信)

②授業を受ける前(5月)と後(現在)で、粘土に対する気持ちにどのような変化がありましたか。

授業前(5月)の気持ち: 爪の間に、ほいりそうだな。簡単そうだな。  
授業後(現在)の気持ち: 粘土って油粘土だけじゃなく、沢山種類があるんだね。砂の状態から作って加えて粘土にする工程が難しかったぞ。

③テラコッタ粘土の制作体験を通して、将来自分が関わる子どもたちとも一緒にやってみたいと思いましたが、下記のとちらかに理由を記入してください。

保育の現場でも取り組みたい。理由: 手触りがおもしろいから。  
粘土はあまり取り組みたくない。理由:

④将来、保育の現場で粘土を扱うことになった場合、子どもたちに粘土に触れることを通してどのようなことを体験してほしいと思いますか。  
それを実現するために、実際の粘土遊び(感覚遊びや造形遊びなど)では、子どもたちへの言葉かけの際、どのようなことに気を配りたいですか。

体験してほしいこと: 自分の手が形を変化させることが出来るということ  
言葉かけで配慮したいこと: いろんな形のものをたくさんつくる!!

⑤「造形」はどんな授業だと考えますか。前期を通して、どんな力が育ちましたか。

「造形」はこんな授業だと思う: 子どもに買って来て彫刻する。保育士自身が注意点を教える。こんな力が育った: 手先の器用性。制作を楽しむこと。

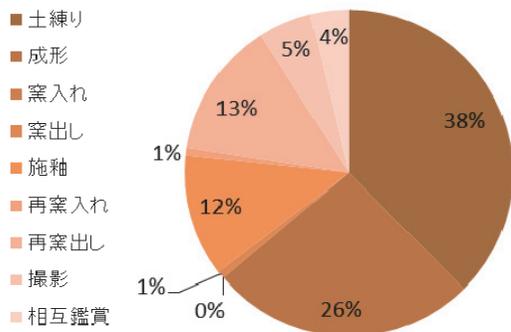
自由記述欄

いろいろものを制作できると子どもに褒めたかんじでとても楽しかったです。また、保育士目録で、このように3を注意書き!!ということもバリエーションがたっです。

前期15回、おつかれさまでした!

【図4】「テラコッタ制作ふりかえりアンケート」記述例

にもなるだろうと予測される。また、学生にとって、回答する際に粘土制作について具体的に思い出し心を動かすきっかけとなるように、第1問目として設定した。結果は【図5】と【表2】にまとめる。



【図5】最も印象的な制作過程 (N=133)

【表2】最も印象的な制作過程とその理由

制作過程 人数	選んだ理由 (「～から」という語尾を省略)
①土練り 50名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めてだった</li> <li>・びっくりした、<u>驚いた</u>、<u>どろどろで驚いた</u></li> <li>・粉から粘土に変わり<u>楽しい</u>、<u>面白い</u>、<u>分かった</u>、<u>ワクワクした</u></li> <li>・<u>感触の変化が手で感じられ</u> <u>感覚が面白かった</u></li> <li>・土の冷たさが<u>楽しかった</u></li> <li>・職人みたいで<u>新鮮</u></li> <li>・パンみたい、料理みたい</li> <li>・不思議な感覚</li> <li>・練る感覚が<u>懐かしい</u></li> <li>・触った感じが気持ちよかった</li> <li>・自分で作っている感じがあった</li> <li>・程よく軟らかく練られた</li> <li>・何も考えず好きなようにできた</li> <li>・手触りなどが特徴的で大変だけど<u>楽しかった</u></li> <li>・力を使ったのが面白かった</li> <li>・水の量で軟らかさが変わる</li> <li>・失敗した</li> <li>・一番手がこんだ、<u>すごく大変</u>、<u>思っていたより硬く大変</u></li> <li>・菊練りが<u>難しい</u>、<u>見た目より難しかった</u></li> </ul>

②成形 35名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・想像を膨らませるのが<u>楽しかった</u>、<u>ワクワクした</u></li> <li>・イメージを形にする<u>楽しさ</u></li> <li>・好きな形にできる、<u>技や道具により様々に変形できるのがすごかった</u></li> <li>・手で触り形を作り上げる<u>楽しさ</u></li> <li>・<u>一番力を入れたし楽しかった</u></li> <li>・見た目より<u>難しかった</u>、<u>苦勞した</u></li> <li>・<u>どんな形にするかたくさん悩んだ</u></li> <li>・思うようにできず<u>時間をかけた</u></li> <li>・丁寧につくった思い出が強い</li> <li>・<u>いろいろな技法(糸で粘土を切ったりするのが初めて、手びねりが楽しかった、板づくり、形に合った技法があることに驚いた)</u></li> </ul>
④窯出し 1回目 1名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粘土を焼くとどうなるのか分からなかった</li> </ul>
⑤施釉 16名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・釉薬がたれて下についてしまうことを初めて知った</li> <li>・初めて体験した、<u>不思議</u></li> <li>・本焼き後(色が変わる)をイメージしながら着色した、<u>ワクワクした</u>、<u>楽しみだった</u></li> <li>・色がなかなかつかなかった</li> <li>・一番考えた</li> <li>・色の変化が難しかった</li> <li>・着色すると印象が変わった</li> <li>・方法を知れた</li> <li>・かつて陶芸をやっていたが、塗り方が久しぶりだった</li> </ul>
⑥窯入れ 2回目 1名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おはじきが溶けてきれいな色になることを初めて知った</li> </ul>
⑦窯出し 2回目 18名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おはじき<u>キレイ</u>、<u>着色キレイ</u></li> <li>・嬉しい、感動した</li> <li>・<u>驚いた</u>、<u>面白い(色もサイズも想像と違うものができて)</u></li> <li>・色むらが<u>いい</u> <u>感じで完成</u></li> <li>・頑張りを感じられた</li> <li>・長い時間かけたから<u>楽しみだった</u>、<u>わくわくした</u></li> <li>・ビー玉がどうなっているか気になっていた</li> <li>・完成作品と初対面できた</li> </ul>

⑧撮影 7名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いかにキレイに見せるか考えるのが楽しかった、面白かった</li> <li>・思い通りにできなかった作品も写真で工夫するだけでよい印象になった</li> <li>・好きなように撮れてよかった</li> </ul>
⑨相互鑑賞 5名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの作品を見るのが面白かった(作品以外の背景も)</li> <li>・ユーモアや発想力の豊かさ</li> <li>・自分が思いつかないアイデアがたくさん</li> <li>・携帯を使うのが大学生らしい</li> </ul>

円グラフ【図5】から分かるように、〈土練り〉・〈成形〉が最も印象的だったとする回答が多く、続いて〈施釉〉・〈再窯出し〉、最後に〈撮影〉・〈相互鑑賞〉と続いた。〈土練り〉【表1】では、テラコッタの粉の状態に少しずつ水を加えながら最終的には手に身体全体の体重をかけて土を練る。〈成形〉では、4つの制作技法(手びねり、板づくり、紐づくり、ふたつ割り)を初めに大塚教授が全員の前で実演して紹介した。粘土は一度窯で焼くと硬くなり落とすと割れるが手では変形しなくなるため、〈土練り〉・〈成形〉は、唯一さらさらの粉や軟らかい粘土に触れる機会である。焼成前のいわば作品になる前の素材としての粉や粘土に直に手で触れる過程に心が動くことが窺える。特に〈土練り〉は市販の粘土(あらかじめ練られて袋詰めされている)にはない作業過程で、全員が初めての体験であった。その前週の授業課題の「小麦粉粘土」【図1】でも粉に水を加え練る体験をしたばかりだったが、それとも少し勝手が違い、「水分調整が上手いかわず難しく苦戦した」、「ベチョベチョで失敗」、「大変だった」という少数の苦労した声も聞かれた。また、「料理している気分を味わえた」、「パンみたい」というこれまでの生活や体験と結び付けて捉える感覚や見立ての声も聞かれた。また、「何も考えず好きなようにできた」とい

うコメントからは、慌ただしい生活から解き放たれ、無心で没頭する時間の大切さを感じられたことが窺えた。授業では多くの学生が歓喜の混じる驚きの声を上げ、苦戦しながらも粘土を練る姿が印象的であった。アンケートにはマイナスの意見が少なく、その不慣れさによる難しさを楽しんだ学生が多かったようである。きっと幼児もそうであろうと思われた。

その次に票が多かった〈施釉〉・〈再窯出し〉は、粘土作品を1週間乾燥させ素焼き(800度)した作品に釉薬で着色する過程と、それを本焼き(1260度)した完成作品に再会する過程である。何名かは陶芸教室で体験したことがあるとのことだったが、その他の大方の学生はやはり初めての体験であった。絵の具を扱う経験はあっても、焼いた粘土に塗るのはまた違う新しい体験である。着色したものを本焼きするとガラス化して表面の質感も見た目の色も変わることから、着色している時は今後の色の変化について一体どうなるのかと「わくわく」している様子であった。「色」の要素が加わったことで、最初の〈窯入れ〉0%、〈窯出し〉1%と比較すると、かなりインパクトが強い結果となった。

次に票を集めた〈撮影〉・〈相互鑑賞〉については、昨年度<sup>1)</sup>からの取り組みである。本年度も、大学内外の自分が選択した場所に完成作品を置いて各自携帯電話等の機能を使用して撮影し、大学のパソコンを通して学内専用パソコンシステム(Yドライブ)にデータを提出する。その翌週に、1年生全員分の提出画像一覧を掲示して相互鑑賞し、各自が選んだよいと思う3作品についてQRコードを活用してコメント送信するという形態をとった。自分の立体作品を画像として平面化して如何に見せるかという点は初めての者が多い一方で、日頃から慣れ親しんでいる携帯ツールを使いこなして工夫し、各々納得のいく画像が撮れたようで

あった。鑑賞においてもじっくり見入っている様子で、テラコッタ作品を生で鑑賞するのはまた違う面白さがあったと見受けられた。自然と1年生全員の作品画像に目を通すことを促すしくみである。現場においても、幼児の様子や作品を撮影し記録する仕事があるため、授業内で一度経験する意義もあるといえる。

この問い①全体の回答で興味深かったのは、学生の選択理由の記述から、初めて知ったり、驚いたり、楽しかったり、わくわくしたり、不思議な感覚になったりしたことは印象に残るということである。大変な思いやがっかりした気持ちではなく、初めてのことにどきどきしながら未知のことに胸を躍らせるのは、幼児もきつと同じではないだろうか。自分の予想通りにはならない想像もつかない自由性・発展性が粘土にはあるといえる。そして触覚を働かせ、土を練る過程が最も学生たちの心に残ったという結果は、作品制作という造形活動以上に、遊びとしての単に触れる過程そのものが重要な意義を持つことを示唆していると考ええる。

問い② 授業を受ける前(5月)と後(現在)で、粘土に対する気持ちにどのような変化がありましたか。

この問いは学生の粘土に対するプラスかマイナスの心の動きを本人が認識し、その目に見えない部分を筆者も確認したために設けた。

【表3】において、気持ちの変化を①マイナスイメージ→プラスイメージ、②元々プラスイメージ→さらにプラスイメージ、③元々プラスイメージ→ややマイナスイメージに分類し学生の言葉を一覧にした。

【表3】粘土に対する気持ちの変化(授業前→授業後)

- ① マイナスイメージ→プラスイメージ
- 「苦手」、「苦手意識高く、とまどった」、「乾燥してヒビが入るから苦手」  
→ 「色々な種類の粘土があって、触り心地も違って楽しい」、「とにかく楽しい、自分らしい作品を作ればいい」、「水を足していけば大丈夫」
  - 「不得意だから嫌」  
→ 「上手になったわけではないが様々な工程を知れて楽しい」
  - 「難しそう」、「自分にできるか不安」、「大変そう」、「立体作るのが難しそうで嫌だ」  
→ 「ちぎったりこねたり楽しい」、「上手い下手関係なく、作品に愛着わいた」、「粉の質を理解し、扱いが分かるようになった」、「意外と簡単だし面白い」
  - 「あまり触りたくない」  
→ 「楽しい、もっとやりたい」、「感触気持ちいい」、「完成したのを見た時は嬉しかった」
  - 「手が汚くなり思うように作れない」、「楽しそうだが、手が汚れるのが嫌だ」、「準備が面倒、手がくさくなる」、「においがきついイメージ」 「独特な香り」、「べとべと」  
→ 「いろいろ種類ある」、「楽しい、もっと技法をやってみたい」、「もう一度、作り直したい」、「汚れは洗えば落ちるし面白い」、「興味が湧いてきた」、「案外手軽にできる」、「こんなに硬くなるのだ」、「種類によって香りが違う」
  - 「できるだけ簡単なものを作りたい」、「あまり興味なし」  
→ 「もっと色々作ってみたい」、「久しぶりで楽しかった」、「様々な形を造れるの楽しい」
  - 「油粘土しか知らない」、「練って形をつくり飾っておくもの、油粘土のイメージが強い」  
→ 「色々な種類、焼き物にもできることを知った」、「陶芸を体験して視野が広がった」
  - 「形つくるだけ、種類もない、ただこねるだけ」  
→ 「色々な種類と特徴、奥が深い」、「色をつけたり、練り方・技法も作品によって違う」、「半分に割ったりすることが必要」
  - 「作って終わり」  
→ 「形はそのまま残せる」
  - 「各種粘土の説明が不可能」  
→ 「各種粘土の用途やプラス面・マイナス面が分かった。」

- 「子どもが口に入れたら危険」  
→「小麦粉粘土を使うと安全」（アレルギーや衛生面での配慮は必須）
  - 「子どもの遊び」  
→「年齢問わず楽しめる遊び」、「本格的なものができてすごい」、「奥深い」
  - 「ただの遊び」  
→「粘土を通して子どもたちはいろいろなことを学ぶのだ」
  - 「手にくっついて嫌な感じ」  
→「水の量の調整で嫌な感じがなくなり慣れてきた」
  - 「粉から粘土ができるのかな？」  
→「粉からこんなにしっかりしたものができなのだ」
  - 「作ってもまた違う形に変形させる」  
→「一つの形をつくり、一生残る」（粘土遊びではなく焼き物制作の場合）
  - 「硬いのだっけ？軟らかいのだっけ？」  
→「色んな形ができて楽しい」
  - 「小学校以来触っていないな」  
→「色々な種類を色々やってみたい」、「保育の現場では絶対扱いたい」
- ②元々プラスイメージ→さらにプラスイメージ
- 元々「面白い」、「好き」、「楽しみ」、「懐かしい」  
→「大好き」、「いろんな工夫ができて面白い」、「楽しい」
  - 「ここで扱う粘土はどんな感じだろう」  
→「やっぱり粘土は楽しい」
  - 「元々ある粘土で何つくろうかな」  
→「粉をこねるところからしっかりやろう」（土練り当日の抱負か、あるいは次回への抱負か）
  - 「感触が面白く楽しい」、「もちもちしてずっとのばしたりしてられる」（長時間あきずに触れて楽しめるという意味）  
→「平面とは異なった楽しさ」（造って形にする）、「いろいろな練り方」
  - 「小学生の時に学童でやっていたので楽しみ」、「保育園・小学校以来で楽しみ」、「幼稚園でやったなあという懐かしさ」、「小さい頃遊んだな」  
→「粘土を粉からつくることは初めてでこういうふうにできているのかと思った。たくさん

種類あり面白い」、「意外と奥深い」、「自由に造れる楽しさ」、「またやりたい」、「久々にやって楽しかった」、「色々な方法で形を変えられてすごい」

- 「たまに触れたいと思っていた」  
→「粘土が家に欲しい」
  - 「触れたかったけど、触れる機会がなかった」  
→「楽しかった」
  - 「軟らかい」  
→「かたさ変えられる」
- ③元々プラスイメージ→ややマイナスイメージ
- 「小中学校でもやったから簡単そう」、「軟らかく変形しやすい」  
→「ただ物を作るだけでなく考えることが多くて難しい」、「硬く形を変えるのは容易ではない」
  - 「楽しそう、面白そう」  
→「楽しいけど難しい」
  - 「楽しみ、早くスケッチブックまとめたい」  
→「まとめるアイデア出てこない」

粘土や彫刻が身近でない学生たちには、設問の「粘土に対する気持ち」という文章表現が若干違和感を与えた可能性があるが、元々マイナスイメージがあった学生がさらにマイナスイメージになったという回答は無かった。①が最も多かったことから、授業が粘土に対する学生の抵抗意識の改善に寄与できたことを確かめられる結果となった。「またやりたい」、「もっとやりたい」という気持ちを誘発できたことは、現場で幼児と取り組む際にも、積極的に前向きな姿勢で臨めることが期待できる。

③において、粘土の水分調整がうまくいかず難しさが強く印象に残ってしまった学生がいた。筆者は支援者として、より机間指導を徹底し、解決方法を共に見出していくプロセスも大事にしていくべきであると改めて考えさせられた。

問い③ テラコッタ粘土の制作体験を通して、将来自分が関わる子どもたちとも一緒にやってみてみたいと思いませんか。下記のどちらかに理由を記入してください。

保育の現場でも取り組みたい。理由：

粘土はあまり取り組みたくない。理由：

この問いは、自分だけの体験で終わるのではなく、保育者の観点を持ち子どもにも体験させたいことかどうかを問うものである。問い②までは個人の制作体験を振り返るものであったが、問い③からはその体験と保育者の視点を結び付け、保育者として粘土の活用を意識することを考えるきっかけとした。下記の【表4】に、現場で取り組みたい理由として、①粘土の特性に着目した回答、②テラコッタ粘土ならではの回答、③幼児の表現に着目した回答を分類してまとめた。また、【表5】には現場では取り組みたくないという少数意見をまとめた。

【表4】 保育の現場でも取り組みたい理由

① 粘土の特性に着目した回答

- ・「冷たい、軟らかい、気持ちいいなど素手で感じられる」、「手触りなどの面白い体験」、「感触と楽しさを味わってほしい」、「初めての感触や気持ち(ワクワク・ドキドキ)を体験してもらいたい」、「感触を楽しめる」、「感触が独特で、普段の生活ではあまり体感できない」、「自分も楽しかったから」、「子どもたちも楽しんでくれそう」、紙粘土とかとはまた違う感触を味わわせてあげたい」、「感触だけでも多く粘土からは学べるから」、「触覚が敏感なうちに刺激を与えたい」、「五感の一つの触覚をフルに使うから」
- ・「子どもたちも夢中になれるから」
- ・「指先の発達のため」(小麦粉粘土)
- ・「ずっと形として残るのが良い」、「何かを作ることを体験したほうがよい」、「無形物から作品を作ることを学んでほしい」、「たくさんの作品が作れることを覚えさせたい」、「大まか

でもできるし、こだわれば細かな物にもできるから」

- ・「たくさんのことを経験させたい」
- ・「自分で物を作るということが大切だと思うから」、「自分で一から物を作る楽しさを知ってもらいたい」
- ・「作りたいものを立体で表すことができる」、「立体的な形を想像する力をつけるため」、「自分の好きなものを立体に作れる楽しさを共有したい」
- ・「発想力、想像力が豊かになる」、「自由な発想で色々な形を作れる」
- ・「一人ひとり個性が表現できる」
- ・「達成感を味わえる」、「完成したときの感動を味わってもらいたい」
- ・「粘土遊びは子どもの遊びで欠かせない、創造力もつく」、「今の自分がやっても楽しいから子どもたちも絶対やりたいと思う」

②テラコッタ粘土ならではの回答

- ・成形だけでなく練ったり着色したりできる
- ・「普通の粘土では体験できないから」
- ・「粉から粘土を作るのが楽しかったから」
- ・「粘土が焼く前後で変色することなどを伝えたい」、「焼いた時の色の出方に感動したから」、「軟らかかった粘土が焼いて硬くなる変化を体験してもらいたい」
- ・「作品をその形のまま残すことができるから」
- ・「土からいろんなものが出来ていると知ってほしい」
- ・「短期的ではなく長期的にも取り組めるので集中力を養えるから」
- ・「どろだんごを作るような土とは感触も違い、作品も長持ちする」

③ 幼児の表現に着目した回答

- ・「子どもたちの自由な発想がみられて楽しそう」、「子どもたちの創造力を知りたい」、「自分の表現を生かしどんなものを作るのか気になる」、「自分とは違う感性を持っている子どもの作品を見たい」

【表5】保育の現場ではあまり取り組みたくない理由

- ・「自分は楽しかったが、周りを汚されたり準備したりするのが大変」
- ・「粘土はやりたいが、テラコッタ粘土は汚れるので嫌だ」(他の粘土ならよい)
- ・「テラコッタ粘土は焼くのが大変そう」
- ・「子どもに見本を見せられるほどできない」

粘土に関わらず、絵の具でも折り紙でも、抵抗意識・苦手意識のある学生は必ずいるはずで、それが普通であると考えられる。また、幼児にも無理矢理やらせることでもない。【表4】のように、保育現場でもぜひ粘土の活動に取り組みたいと考える学生が128名、【表5】のように取り組みたくないという意見が4名、未記入が1名いた。取り組みたくないという4名は、全て同じクラスの者であり、内3名は同じ机で制作していた者である。楽しかったし、できるならやりたいという思いがありながら、準備の大変さや汚れが気になったり、何か見本を見せる場合に自信が無かったりという理由が挙げられた。プラスの感情もマイナスの感情も、同じ空間にいる者同士で増幅されやすい。これらの学生たちが孤立しないよう、筆者在授業中に気づいて制作の不安点を解消するよう努めたり、彼らに教室内の他の意見を聞く機会を配慮したりする対処ができたのではないかと反省している。

テラコッタ粘土を幼児に体験させたいかという問いに関して、実際は現場に陶芸窯が併設されていることはほとんどないため、焼き物制作を実現することは容易ではないのが現状であろう。しかし、多くの学生が粘土の制作体験を通してその特性を体感し、粘土による幼児教育の可能性を自分の言葉で語れるようになったのは、この授業の意義を感じさせるものである。また、次の問い④にもつながるが、日常生活であまり感じる事のない粘土の触感を通して、創造力や個性を伸ばす機会になることを自ら実感したことは、現場におい

て生かされるだろう。

問い④ 将来、保育の現場で粘土を扱うことになった場合、子どもたちに粘土に触れることを通してどのようなことを体験してほしいと思いますか。それを実現するために、実際の粘土遊び(感覚遊びや造形遊びなど)では、子どもたちへの言葉がけの際、どのようなことに気を配りたいですか。

この問いは、将来保育現場で子どもに体験させたい内容と、その際の保育者からの言葉がけで配慮したいことを考えることで、具体的に粘土の活用をイメージするために設けた。筆者が授業で言葉がけする際も、幼児への言葉がけに通じるものを意識しているが、それを受けて学生が感じ取ったことを(プラスでもマイナスでもその心の動きに伴い)、今度は子どもたちにどのように還元していくかという点を調査するものである。教員からのみならず、友人からの言葉かけもあっただろう。それらも踏まえて自分であれば幼児にどう声をかけるかを考えさせた。この言葉がけの内容が、自分が教員から受けた言葉と一致する場合も多いのではないかと予測される。なお、テラコッタ粘土に限らず、あらゆる粘土を想定して「粘土」と表記した。

【表6】子どもたちに粘土で体験してほしいこと  
→それを実現させるための言葉がけ

- 「自分の好きな物を自由に表現」  
→「良い所を見つけほめる」、「失敗してもポジティブな声掛け」、「ネガティブなことを言わない」、「とにかく優しく、困っている子がいたらサポートする」、「あまり得意でない子が落ち込まないように」、「子どもたちが好きそうなものをオススメする」、「好きな動物、乗り物、食べ物は何か問いかける」
- 「限界無く、好きな形を造れる」「軟らかさ、自由につくれる楽しさ」

→「自由に、好きなようにと、子どもの感性を尊重する」、「粘土を保育者が実際にのぼして見せて、こんなに軟らかいんだねと共感し合う」、「形にとらわれずに好きなように作ってほしい」、「土であることや硬くなることに限定されずに取り組んでもらいたい」、「先入観を与えない」、「汚れること（後片付けなど）を恐れずに好きに取り組んでほしい」

●「ものの変化、肌触り、バランス」、「のぼし、まるめ、形づくるという工程」、「体で感じてほしい」、「自分の手で一から物をつくる楽しさや大変さ」、「達成感」、「完成した時の喜び」

→「自由にやりたいように」（こうした方がいいと提案や口出しをせず、また想像力を奪わないように、これだと決め付けて話しかけない）

●「触った時の感覚、どんなものをつくらうか考える発想力、創造力」、「どきどき、気持ちよさ」、「色々な種類があることを知ってほしい」、「手が汚れるのも気にせずたくさん土に触れてほしい」、「手にはりつくあの感触と立体を作る面白さ」、「素材そのものの感触や形の変化」

→「いろいろつくれる」、「テーマを決めない」、「あまりルールを作らない」、「型を決めつけず自由に」、「先生は見守り、自由にやらせる」（子どもたちの発想をなくさぬように）、「かわいいうさぎさんだね、何を作っているのなど子どもたちの活動を増進できるような言葉かけ」、「子どもたちの粘土に触れた時の感覚を大切にす言葉かけ」、「子どもだけでなく自分も楽しむような言葉かけ」

●「たくさん種類の粘土に触れる」

→「こっちとこっち何か違うかな、と意識的な声掛け」

●「感覚遊び」

→「何を作ったのか聞いてから話かける」「どんなさわり心地か」

●「五感」

→「作ろうと思ったことを実現できるような言葉かけ。ヒントを出しすぎず、自分で考えるようなもの」

●「土に触れる（自然と関わる）」

→ 否定しない

●「手触り、イメージを形にする楽しさ」、「ちぎったり道具を使ったり」

→「否定しない」、「前向きなアドバイスをする」「食べない、投げない」

●「触感、形を整えること」

→「食べないで」

●「無形物から作品を作ること」

→「食べない、目に入れない」

●「色々な物を造れるということ、達成感」

→「口に入れない」「爪を短く切る」

●「手触り、におい、何がつくれるのか」

→「口に入れない」

●「感触、種類、焼くと固まる不思議」、「触覚（冷たい、硬い、柔らかい等）」、「全身で土を感じる。例えば足で踏んでみる」

→「食べない、よごれたらすぐ洗う」

●「計画性、発想力、行動力」、「挑戦しようとする気持ち」

→「食べない、優しく扱ってあげよう」

●「自分の力で自分の表現をする」

→「食べない、粘土制作上の注意」

●「水にぬれるとどうなるか、乾燥したらどうなるか、粘土の質」

→「食べないように等」

●「自分で粘土を練り作品を大切にす」

→「口に入れない」

●「正解だけを教えるのではなく水の量で硬さが変わったりすることなどを自ら体験してほしい」

→「危ない時以外は子どもから話しかけてきたことに応答や軟らかいねなどの一言ですませる」、「子どもが素直に感じたことを教えてくれた時に一緒に共有できるようにしたい」、「練る時に効果音をつけたりしてできるだけ分かりやすくしたい。」

●「土のひんやりした感覚」

→「触ってどんな感じがするのかが聞く」

●「たくさん感覚体験」

→「たくさん触ってもらう」

●「一つずつの段階を重ねることでその作品を好きになること」

→「上手い下手でなく“どんなところを自分がかんばったのか”を伝えること」

●「大切に扱わないとすぐに形が変わってしまう」

→「作品に愛着を持ってもらえるようにする」

●「どろだんごを作る」

- 「自由に」
- 「細かいところまでちゃんとしないといけない作品ができない」
- 「みんなは何が好きかな？ここはこれでよかったかな？と問いかけ、自分から発見できるようにする」
- 「感触、作りたいものを作る」
- 「正しい制作技法と注意点をしっかり伝える」
- 「粉から粘土になるときの変化」
- 「水の量で変わる（発見を促す言葉がけ）」
- 「しっかり練らないと上手にできないことと体験して学んでほしい」
- 陶芸は「時間をおいて形などが変化すること」（乾燥により収縮したり、重力により下の方に力がかかったりする）
- 「手の様々な使い方」、「指の動作」
- 「子ども同士のコミュニケーション」

まず注目されるのは、好きなように自由に取り組ませたいという意見が多数あることである。そのために、指導をするよりも温かく見守り、幼児が自ら粘土に単純に触れることを通して感じられる体験を大切に言葉がけをしたいというものが目立った。

また、造形が好きな者ほど、自分の授業での体験（大変だったことも含めて）を子どもたちに伝えたい気持ちが強いように見受けられた。そのために、現場では正解に導く教え方ではなく、自ら体験することで素直に感じてもらい、それを共有したいという意見からは、たとえ失敗しても（幼児は失敗と認識しないかもしれないが）問題ではないという意識が見られた。それから、少し幼児には難しいと筆者が想定する内容を体験させたいと記述する学生も数名見られた。これにより、筆者が学生の体験を重視するあまり、幼児の発達段階を配慮した話が幾分不足していたことを認識した。

さらに気になるのが、体験してほしいことと、言葉がけで配慮したいことの、前後のつながりが見受けられない回答が複数あることである。それ

らは、体験させたいことに関わらず、言葉がけが安全面・衛生面（幼児が粘土を口に入れない、目に入れない、投げない、爪を切る、手を洗うなど）について配慮するものであった。もちろん、それらも明らかに留意すべき点ではあるが、設問の趣旨とは異なるものである。次年度はアンケートの文章を分かりやすく改良して対応したい。筆者も次年度の授業中には、学生が多くの点で気づきを高められるような多面的な言葉がけを心掛けたい。

問い⑤「造形」はどんな授業だと考えますか。前期を通して、どんな力が育ちましたか。

この最後の問いは、前期15回を振り返り学生自身が「造形」とどのように向き合ってきたかを考えるきっかけとするものである。幼児教育における「造形」の位置づけや、現場につながる力の育成について、これまで学んだことをこれからの生かし方に結び付ける目的もある。この問いの学生からの記述に、粘土に関する内容が入ってくるかどうかも筆者は気にかけていた。

【表7】「造形」はどのような授業だと考えるか  
→前期を通して、どのような力が育ったか

- 「レベルの高い作品を作るのではなく、楽しさを知る授業」
- 「難しく考えずにまずはやってみることでアイデアを出す力」
- 「想像力、創造力が豊かになる」、「楽しい、考える、感じる」、「美術的センスの向上」、「感性が身につく」
- 「物を造り上げる工程を楽しむ力」、「絵具、粘土等の使い方」、「創造力」、「発想力」、「想像力」、「紙や絵の具で楽しい遊び」、「表現力」、「丁寧さ」、「考える力が身につく」
- 「発想力を楽しんで作ることが必要」、「自分の個性をのばせる」
- 「試行錯誤しながら作る力」、「どんなものも失敗と思わずとにかくやってみる力」、「表現力や技法」、「創造力」

- 「発想とレパートリーを増やす」  
→「自由な発想力を育てる力」
- 「表現の一つ」、「自分を“物”で表現する」、「絵や物での表現」  
→「アイデア、色の組み合わせ考える力」、「色相についての知識」、「表現したいことを表現できるようになった」、「作る上での知識」、「自己表現力」、「色々な粘土の種類や遊び方」
- 「様々な物に触れられ、色々な体験できる」  
→「想像力、失敗しても最後まで完成させたいと思う力」
- 「感じるものを思うままに造る」、「自分を表現する」、「テーマをもとに自分の好きなように作品を作る」、「考えたことをモノにできた時達成感が味わえる」、「保育士も子どもも楽しめる作品作り」  
→「個性をのばす力」、「想像力(イメージ力)、表現力」、「発想力(造形ノートにまとめる時)、子どもに教えるのに実際に経験してみることで伝える力」、「保育に生かせる力」、「色の使い方、作品作りのための様々な方法」
- 「どんなものができるのかな?というワクワクがたくさんある」  
→「元々嫌いだったが楽しさを知れた」
- 「自分だけの考えを作品にする」  
→「できないと思っていたことも自分なりに努力する力」
- 「指を自分の思い通りに動かせるようになる」  
→「物を作る力」
- 「自己表現して、他人の作品から発見できる」  
→「少し手先が器用になった」
- 「遊び(絵の具・粘土)を通して子どもたちに身につく力を学ぶ」、「“遊びを通しての学び”が体験できる」、「子どもたちへの遊びの種類」  
→「色使い」、「ページをレイアウトする力」(造形ノートにまとめる時)、「文章でなく絵などで表現しまとめる力」、「まだ分からない」
- 「現場に立つために必要」、「子どもたちの想像力を育む」  
→「子どもの感覚が少し身についた、制作を通していろいろな感性も育った」、「ありのままの自分で作品をつくる力」
- 「子どもに教えたり一緒に楽しむための学び」、「子どもたちに色々なものを使って造る楽しさ

- を伝える」、「子どもを楽しませるために自分も体験しておく所」  
→「想像力、器用さ、バランス力」
- 「楽しさ、達成感」、「表現を考えて自分から進んでやる」→「がんばろうという気持ち、いいものを作りたい」、「いろいろなものに触れて興味深くなった」、「常によい作品にするために工夫し最善をつくす力」、「集中力、試行錯誤する力」、「制作力、最後までやり遂げる」
- 「高校の美術とは違う楽しさ」  
→「器用さ、創造力」
- 造形力や技術  
→「子どもにどのように教えるか、注意することなど、自分では気が付かなかった所など、たくさん知ることができた」
- 「考えの幅が広がる」  
→創造力
- 「自分で具体的にも抽象的にも表せる自由なもの」  
→発想力
- 初心に返ることができる、「基礎を学ぶ」  
→「基礎を学んでから自分で自由に表現」
- 「友達とのコミュニケーションもとれるし楽しい」、「表現を共有する楽しさを学べる」  
→「創造力、道具の扱い方の知識」、「友達の作品を見て自分の作品との違いやいいところはどこかを見つける力」
- 「それぞれの個性が出る」  
→「自分で体験してみることで、気を付けた方がいいところが分かった」
- 「想像していた物と少し違う物ができて臨機応変に対応する」、「丁寧さ、大胆さ」
- 「粘土を粉からつくるたのしさ」
- 「知識」、「図を使ってまとめる力」

結果的に、あえて粘土というフレーズを使う学生は4名と少なかったものの、試行錯誤する力、発想力、想像力、創造力、そして何より楽しむことを学生それぞれが学んだことが窺え、粘土からも少なからず良い刺激を受けていることが感じ取れた。複数の学生の言葉にもあるように、まず授業で自分が体験してみて、幼児と関わる際に大切な点を気づくという流れは、非常に有効であると

考えられる。自らの体験による実感の伴った学びがなければ、幼児に伝えることも共感することも難しいからである。そういう意味で、学生たちが授業で造形を通した様々な体験を積めるように、教員は足場かけをすることが求められる。それは制作を通して専門的知識を得ることのみならず、造形をきっかけにした同じクラスの友人同士のコミュニケーションや協働学習などを通して、人間関係能力を磨くことも、この先保育者になる上で必要な職能である。

造形が物で自己表現する表現手段の1つであるという3名の学生の言葉からは、音楽や体育などの表現も学んでいる学生ならではの客観的視点であると感じられた。多方面からの学びを通して、保育者としての教育能力や個人的特性（信頼性、豊かな人間力など）を高めていくことが期待される。

## 6. おわりに

本稿では、アンケートにおける学生の生の声をできるだけ生かすようにして、保育者養成の視点から、粘土を活用した幼児教育の可能性を探ってみた。その結果、本課題を通して学生たちがそれぞれに粘土の特性を捉え保育の中で活用していく心の準備をするきっかけになったと理解される。また、本課題は、「造形」の中で唯一の立体（単に厚みがあるというだけではなく、構造を考えた立体）を造る課題である。筆者が想像していた以上に粘土の特性である触覚性に着目するコメントがあり、現代の便利な生活の中で実際のものに触れるよりも画面上で視覚を通して情報を得ることに慣れた学生たちにとって、素材について考えるよい契機にもなったのではないだろうか。この課題の意義を改めて認識させられた。

椎橋氏は、幼児期に粘土に触れることを例に出

し、子どもたちにとって、「応答性のあるもの〈素材〉とたくさん出会うことと、応答性のある保育者や大人とたくさん出会うことが大切」<sup>2)</sup>と述べている。「子どもの心の揺れを感じ取り共感していくことが子どもの豊かな育ちの大切な援助」となり、「安心して保育者に寄り添い活動することができる」ことにつながるという。筆者も「造形」の本来の目的は表現技法の習得を促すことではなく、幼児が試行錯誤を通して自らつくる喜びや発見の驚きを体感し、表現する上での創造力を育むことを重要視した保育支援であると考えている。学生たちの苦手意識にも寄り添い、学生の視点で学びの過程を考え、1人ひとりの学生が居心地よく感じられる学習空間をつくり、安心感を持って発言し創造力を発揮できる場で、深い学びにつなげられるようにしたい。すなわち、筆者自身がまず応答性のある支援者として学生に接し、応答性のある素材を提供していくことが、彼らが保育者になった時に生きるのではないかと考えられる。

近年、教育雑誌でも「触覚とアート」<sup>3)</sup>が特集されるなど注目を集めている。筆者も手触り、舌触りで乳幼児が物を認識しようとする現場を見受けることがしばしばあり、認知面において視覚や言語の発達に結びついていく貴重な体験・時期であることが窺える。また情緒面での作用も粘土の自由性が心を解放するという効果も聞かれる<sup>4)</sup>。学生のアンケートからも「幼児に自由にやらせたい」、「楽しい体験をしてほしい」という願いが伝わってきて、自らが課題を通して認知面・情緒面における作用を体感できたことが窺えた。

今後の研究への示唆としては、今回は保育者養成の視点からの一考察として論考したが、学生アンケートを主なデータとして粘土を活用した幼児教育の可能性を考えるのではデータが不十分である。今後の課題として、現場（保育園・幼稚園）での調査を通して幼児を中心とした論考をする必要

があると考えられる。授業でも、1人ひとりの幼児の視点を尊重した造形活動の支援の在り方をもっと考える機会を要すると感じている。粘土を活用した幼児教育の可能性や、粘土に関わらず触覚性を刺激する素材が幼児教育に与える可能性は多岐にわたり、まだまだ研究の余地がある。国内の先行研究や世界的に注目されているレッチョ・エミリア市の実践から学ぶことも意義がある。レッチョの幼児教育の現場には、教育者と共にアトリエリスタと呼ばれる美術の専門家がお子様たちの造形活動を支援しているが、その存在・役割の意義についても機会を改めて論考したい。今後も専門力と教育力の向上を図り、継続的に研究を推し進めながら授業改善に努めていく必要がある。

さらに、アンケートの内容についても再検討の余地がある。今回は誘導になるのを危惧して回答例の類を示さなかったが、学生が自らの気持ちを思い起こし引き出すきっかけとして回答の方向性を示すことも効果的な可能性がある。また、大塚教授よりアンケートの最も印象的だった過程を選ぶ問いについては、1つ選ぶのではなく順位付けにする改善案をご指摘いただいた。筆者も、確かに順位付けさせることにより制作過程の詳細を思い出しながら自らの気持ちによりいっそう向き合うことを期待できそうだと考えている。また、大塚教授は何より大切にしたいのは、「造形の記憶」であり、続いて「作る時のどきどき感や、失敗したらどうしようという不安、できた時のうれしさは、多分、園児も、学生も、私も同じです。また、子どもは学生ほどでき上がりを気にしないものです。形を作る過程そのものを楽しんでいる。2年後に学生たちが保育の現場に出ても、ここで経験した感覚を忘れないでほしい」<sup>5)</sup>と述べている。筆者も同感するところであり、作品そのもの以上に実材に触れることや成形に取り組む過程で動く心の在り方を大事にすべきであると思う。目に

見えない部分の記憶、触覚から喚起される諸感覚を大切にして、粘土の授業を有効に活用していきたい。

最後に、授業を進めるにあたり共に「造形」を担当している大塚習平教授には、テラコッタを専門とする彫刻家としての貴重なご指導を賜りました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

### 参考・引用文献

- 1) 大塚習平「立体から平面への二段階の表現と相互鑑賞—テラコッタ作品による表現と写真撮影による表現を通して—」『湘北紀要』第37号 湘北短期大学 2016 pp.41-51
- 2) 椎橋げんき「シリーズ 乳幼児はすごい! ⑥ものが変わる」『教育美術』2016年10月号 公益財団法人 教育美術振興会 pp.14-15
- 3) 「特集 触覚とアート」『教育美術』2016年9月号 公益財団法人 教育美術振興会 pp.28-49
- 4) 横英子『保育をひらく造形表現』萌文書林 2008 p.39
- 5) 本学ホームページ 学科案内 クローズアップ 授業「造形」掲載記事 2011年6月17日取材

### 図版出典

【図1、図2、図3、図4】筆者撮影

【図5】筆者の作成したアンケートに基づき集計

Feasibility of Early Childhood Education through Clay Arts  
- From the Perspective of Nursery Teacher Training -

Kei MIKAMI

**[abstract]**

The intended purpose of figurative arts in early childhood education is not to foster infants' representation skills. Taking charge of the class "Terra Cotta Cray Arts" in the first semester, the author considers the way to help infants feel the pleasure of self-creation and the wonder of self-discovery through trial and error and to enhance their creative power of representation. Based on the questionnaire survey results, the present study discusses the feasibility of early childhood education through clay arts in relation to developing professional competence of nursery teachers the students would like to be in the future.

**[key words]**

Clay, Figurative arts, Early childhood education, Nursery teacher training, Sense of touch